

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	鈴木 和夫
学位	博士 (医学)
学位記番号	新大博 (医) 第 1785 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
博士論文名	Analysis of perimenstrual asthma based on questionnaire surveys in Japan. (質問票を用いた日本での月経喘息の検討)
論文審査委員	主査 教授 成田 一衛 副査 教授 中田 光 副査 教授 菊地 利明

博士論文の要旨

【背景】

女性の喘息患者は、月経にともない喘息症状の変化を生じることがあり、古くから月経喘息として知られている。1980 年代には、月経喘息の特徴、すなわち月経前後のピークフロー値の変化や臨床症状などが明らかにされた。原因に関しては、ホルモンバランスの変化などが指摘されている。過去の報告では、30～40%前後の女性が月経と喘息症状の関連を自覚しているとされており、医師は月経喘息により注意を向けるべきである。しかし、本邦では、医療従事者および患者とも喘息の悪化と月経などの関連に関しては、あまり認識されていないよう思われる。

【目的】

日本の月経喘息の頻度、患者背景、喘息コントロール状況、および喘息関連事象を調査する目的でアンケート調査を行なった。

【方法】

2004 年 9 月から 10 月までの 2 か月間に新潟県内医療機関でアンケート調査を行なった。対象は、同期間内に新潟県内医療機関を受診した、16 歳以上の喘息患者とした。

アンケート調査に、月経に関する質問事項を追加した。具体的には、女性喘息患者には、月経の有無を確認した。月経があると回答した女性には、月経が喘息に、常に影響を与えるか、時々影響を与えるかの質問を行なった。その後、月経が喘息に与える症状が、喘息症状を悪化させるか、改善させるかの質問を行なった。月経が喘息に影響を与える時期に関して、月経前、月経中、月経後の質問を行なった。

喘息コントロールに関するアンケートとして、アンケート回答の 2 週間前の喘息発作の有無を確認した。過去 1 年間の発作の有無についても質問した。

喘息に関連した緊急事象について、救急車利用歴、救急外来受診歴、喘息入院歴、致死的喘息の既往（意識消失発作、人口呼吸管理を有した発作、アスピリン喘息）について質問した。

日常生活満足度についての質問もおこなった。

アンケート用紙には、医師記載欄を設け、現在の治療内容、喘息のタイプ（アトピー型、非アトピー型）、

日本アレルギー学会による喘息治療分類による重症度の記載を依頼した。

月経が喘息に、常に、あるいは、時々影響をあたえ症状を悪化させると回答した女性を月経喘息群、月経が喘息症状に影響を与えないと回答した女性を非月経喘息群とした。

【結果】

新潟県内の200床以上の28病院、200床以下の15病院、35の診療所が調査に協力し、2865人の回答が得られた。月経と喘息との関連については、常に影響を与える19例、時々影響を与える、が37例であった。月経が喘息症状を改善させるとの回答はなく、すべて悪化させるとの回答であった。この計56例(平均年齢36.8歳)を月経喘息群とした。非月経喘息群は424例(平均年齢38.2歳)であった。月経喘息の頻度は、11.3%であった。症状悪化は、月経前53.6%、月経前および中16.1%、月経中25.0%であった。月経喘息群は、2週間以内の喘息発作が有意に多かった。月経喘息群には、救急車利用歴、救急外来受診歴、喘息入院歴が有意に高く、意識消失発作やアスピリン喘息も月経喘息群で有意に頻度が高かった。また、月経喘息群は、喘息重症度が有意に高かった。使用薬剤については、月経喘息群で、ロイコトリエン受容体拮抗薬、経口ステロイド薬、長時間作用型 β 2刺激薬、経口キサンチン製剤の使用率が高かった。

【考察】

本研究では、月経喘息を、月経前後における喘息症状の悪化とし、自己申告によるアンケートにより調査した。過去の報告では、喘息症状の悪化などに加え、ピークフロー値の変動や、短時間作用型 β 2刺激薬の使用頻度、症状スコアを加味しているものもある。本研究での月経喘息の頻度が、過去の報告例と異なり低かった点は、評価方法や、自己申告によるアンケート形式であった点、医療者も含め月経喘息に対する認識不足が影響していた可能性がある。また、月経時の喘息悪化を患者本人が認識していない可能性も考えられた。本研究では、月経喘息患者は、喘息重症度が高いことが示された。これは以前からの報告と同様であった。新しい知見として、月経喘息とアスピリン喘息との関連が示唆された。この関連は今まで報告されたことがなく、今後、月経喘息の原因解明の糸口になるかもしれない。女性にとっての月経は、喘息にも重要である点を認識する必要がある。

【結論】

月経喘息についてのアンケート調査をおこなった。月経喘息の頻度は11.3%であった。医療従事者のみでなく患者にもその関連性を認識させる必要がある。月経喘息は、重症度が高く、アスピリン喘息との関連性も考えられ、発症機序の解明がまたれる。

審査結果の要旨

女性の喘息患者は、月経にともない喘息症状の変化を生じることがあり、月経喘息として知られている。過去の報告では、月経喘息の頻度は、30~40%前後とされているが、本邦での頻度は不明であり、医療従事者および患者とも喘息悪化と月経の関連に関して、認識が不足していると考えられる。

そこで、申請者らは、新潟県内の喘息患者を対象に、月経喘息の頻度、患者背景、喘息コントロール状況、および喘息関連の緊急事象などについてアンケート調査を行なった。

月経があると回答した女性喘息患者のうち、月経が喘息に常に影響を与えるあるいは時々影響を与える、と回答した患者を月経喘息群とした。月経が喘息症状に影響を与えない、と回答した女性を非月経喘息群とし検討した。

月経喘息の頻度は、11.3%であった。月経喘息群は、喘息重症度が有意に高かった。救急車利用歴、救

急外来受診歴、喘息入院歴も有意に高く、意識消失発作などの既往も多かった。さらに、アスピリン喘息も月経喘息群で有意に頻度が高かった。

本論文では、大規模なアンケート調査での結果であり、信頼性が高いと考えられる。月経喘息は、喘息重症度が高いなどの既知の知見に加えて、月経喘息とアスピリン喘息との関連性を示すことができた点に学位論文としての価値を認める。